視　察　報　告　概　要

１　視察期間　　平成２６年５月１９日（月）
　　午後２時００分 ～ 午後３時００分

２　視察先及び視察事項
・視 察 先　　株式会社ベルビア（酒類製造業）
　　所沢市北原町８６６－１７

・視察事項　　市内製造事業所の工場視察について
　　①工場の特長
　　②地ビールづくりへの取り組み
　　③事業展開・見通し
　　④今後の課題
　　⑤その他

３　視察の目的
　株式会社ベルビアの事業活動は、第５次所沢市総合計画の前期計画に掲げている「総合的に取り組む重点課題」の１つである「所沢ブランドの創造と地域経済の活性化」に寄与しており、新しい所沢ブランドとして今後の一層の成長が期待されていることから、今回視察を行うものである。

４　視察の概要
　株式会社ベルビアにおいて、代表取締役吉村英二氏の挨拶及び会社の概要説明が行われた。その後、緒方氏の案内により工場内の見学を行った。

・会社概要
　株式会社ベルビアは、埼玉県の緊急雇用創出基金事業（起業支援型地域雇用創造事業）を活用し、農商工連携によるモデル事業として、全県域の地域資源である「麦」を活用した地ビールの事業展開を行う事業者（平成２２年度新規創業ビジネスプランコンペ優秀賞受賞者）であり、平成２４年２月に法人設立、平成２５年には酒造免許を取得し、自社工場内に醸造所を設置しており、従業員は４名である。
　なお、吉村氏と緒方氏は高校の同級生で、共同代表の形態をとっている。

・工場概要
　酒税法において、１年あたりの最低製造見込数量（法定製造数量）が定められており、ビールについては６万リットル、発泡酒は６，０００リットルとなっている。
　工場の生産能力は９万７，０００リットルだが、現実的には厳しく初年度は３万リ

ットルを目標に製造している。工場内には、容量１，０００リットルタンクが１０個ある。ビールの製造には約１ケ月かかり、仕込みが１日、発酵工程が１週間、熟成が２～３週間で、温度管理は機械が行っている。

・ビールづくりへの取り組み

地元のために仕事をしたい、若者が夢を持てるようにしたいという思いのもと、「所沢麦酒倶楽部」という住民グループが、市内農家の協力のもと、地域住民とともに大麦を栽培・収穫し、原材料の生産からビールの製造、消費まで、所沢での「地産地消」を行っている。

また、工場は１フロアで規模も小さいが、味はもとより衛生面・洗浄には徹底して気を付けている。

・事業展開

地域密着がビジネスモデルであるが、飲食店の数が少なくパイが小さいことから、全国のビアバーにも出荷している。現在は、約２０軒の飲食店と市内５軒、市外２軒の酒屋で取り扱いがある。

製造目標は３万リットルであるが、飲食店において定期的なペースで出ていることから、市内で１万５，０００リットルぐらいはいくかなという感触を得ている。

また、６月の頭には麦の収穫を控えており、その麦を使った野老ゴールデン２０１４を売り出す予定である。

・今後の課題

原料の大麦の生産から仕込み、醸造まで地元で自ら行う取り組みを知ってもらいたいという思いもあるし、販路も広げていきたい。

販路については、取扱店を倍にしたいと考えている。ただ、飲食店や酒屋に声を掛けきれていない部分や生産量の問題もあるが、倍になれば１万５，０００リットルはクリアできるだろうと考えている。

また、現在は所沢産大麦を香り付けのためグレイン（生麦）のまま原料に配合しているが、いずれ全量を所沢産にしたいと考えている。

◎質疑応答

質疑　市に対して何か要望はあるか。

応答　さいたま新都心けやきひろばで行われる、埼玉県内や全国各地のブルワリーが出店する最大級のクラフトビールイベントに、ぜひとも出店させていただきたい。

質疑　前職もビール関係の仕事だったのか。

応答　２００９年から始め、国内の醸造所においてビール造りを勉強した。

質疑　毎回味は違うのか。

応答　同じものを造っているが出来上がりはちょっとずつ違う。ただ、その味の違いが、小規模醸造所ではかえって魅力でもあるのかなと考えている。

質疑　麦の生産は十分なのか。

応答　原料全部が所沢産の大麦というわけではない。大麦を発芽させた麦芽がビールの原料であるが、麦を麦芽させるには技術も設備も必要である。現在は、所沢産大麦は麦芽にしないで香り付けのために生麦のまま入れており、割合としてはそんなに大きくないので、莫大な量は必要ない。ただ、先の話になるが、いずれは全量を所沢産にしたいと考えている。

５　所感

ビジネスとしての本格的な事業展開は正直なところ、まだまだこれからという印象を持ったが、無理をし過ぎずに着実な歩みを続けられていること、「地元のために仕事をしたい、若者が夢を持てるようにしたいという思い」をベースに取り組まれていることに感銘を受けた。さまざまな課題を乗り越えた先にある今後の成長が楽しみである。

平成２５年６月定例会において、農商工連携モデル事業として補正予算が計上された経緯があったことから、今回視察を行うに至ったものであるが、やはり現場を見て、当事者の生の声を聞くことで認識が深まるということを実感した。

今回の視察を踏まえ、新たなビジネスモデルの創造や地域経済の活性化につなげていけるよう、今後の審査に生かしていきたいと考える。